
まさきだより

令和8年3月23日

東日本大震災 15年 全校で黙祷

東日本大震災が発生した2011年から15年の月日が流れました。本校では全校児童、教職員が発生時刻に合わせて、黙祷を行いました。

2022年夏、個人的に、東京から福島県、宮城県、岩手県の被災地を自家用車で訪れました。途中で、請戸小学校、門脇小学校、大川小学校の震災遺構を見学しました。事故があった福島第一原子力発電所のある浪江町には立ち入り禁止区域があり、昼間なのにあたりは閑散とした雰囲気でした。海岸に行くと、大きな砂浜に、海水浴客は誰一人いませんでした。岩手県にある奇跡の一本松は、崩れた建物の前で大きな姿を見せてくれました。何としても生き延びるといふ強い精神力を感じました。

多くの児童や教職員が犠牲になった大川小学校のグラウンドの真ん中に立ちました。地震が発生してグラウンドの真ん中に児童が避難していた場所です。報道で伝えられたように、確かにグラウンドの端には、小高い山がありました。その山の中腹に、津波の水がここまできたという看板が設置してありました。様々な思いが脳裏を駆け巡りました。

東日本大震災以後には、西日本豪雨、北海道東部地震、東日本台風、能登半島地震、カムチャッカ半島付近の地震など、大きな災害が発生していて、災害救助法の適用自治体数も増えています。

私が訪れた福島県の「福島復興祈念公園」には、4階建て相当の高さの足場が組ま



れていて、その先端には、「津波浸水深 16.5m」の看板がありました。この高さは、水平方向で考えると短いように思われますが、垂直方向で考えたらどれくらいあるのでしょうか。巻き尺を校舎の屋上から垂らしてみたら、16.5mは校舎の屋上からさらに3mぐらい高い位置になりました。（写真赤い矢印の先端）この高さの津波が押し寄せたのかと想像すると、驚くとともに、命の危険について考えさせられました。

発災時刻に大きなサイレンが鳴り、児童、教職員全員で1分間の黙祷を行いました。黙祷とは、亡くなった人を悲しむことです。子どもたちは静かに放送を聞き、真剣な態度で黙祷に臨んでいたと聞きました。災害はいつ起きるかわかりません。東日本大震災の事実を少しずつ学び、教訓として、後世に語り継いでいく人材を育てることが私たちの使命だと考えています。15年の月日が経過しましたが、時代の経過とともに風化させることなく、3月11日には、災害や命の尊さについて

考える機会としたいと思います。保護者の皆様におかれましては、本校の追悼行事にご理解とご協力をいただきましてありがとうございました。校長 花村伸二